

『田奇詩集』の研究

—— 作者と詩集の成立について ——

前 川 幸 雄

序 説

中国の新詩（白話詩・口語自由詩）は、二十世紀の八十年代に入つて、その發展が空前のものとなつた。ただし、その作品の質はどうかということになると、一歩進めた創作の実践と歴史の検証を待たねばなるまい。

ところで、西安の現代詩人の研究をしようとする時には、我々は、先ず文連（中国文学芸術界連合会）の中の、陝西省作家協会所屬の詩人たちの状況を把握する必要がある。これについては、西安の現代・当代詩壇の事情に通じているという点からいっても、同協会陝西分会詩歌工作組副組長を勤めた田奇氏の存在は貴重であるといえる。したがって、氏の業績は研究しないでおく訳には行かない。その研究対象は二つある。一つ目は田奇氏個人の「詩人・批評家としての業績」、二つ目は、「詩人グループ（詩人組）の組織の主要な責任者としての、主に世話役・裏方としての業績」である。二つ目は、活字の形で表に出ることが少ないから分かりにくい。そこで、本稿では、以下の目次のもとに、主として氏の一つ目の業績の研究を進めたい。

田奇氏は、新詩の創作に従事して五十余年になる。氏の詩歌芸術の追求は、主要なものが自由詩である。その成敗得失は、氏の『田奇詩集』に収められた詩によって、その一斑を伺うことが出来る。そこで、『田奇詩集』の研究をするのである。ただし、本稿では、本論の第二『田奇詩集』の研究、迄とする。

第三『田奇詩集』の作品研究、以下は、別稿とする。紙幅の都合による。

目次

序 説

本 論

一、作者研究

一、1、出生と成長の過程

一、2、経歴 新詩創作の進行と活動

一、3、出版作品集

二、『田奇詩集』の成立の研究

- 二、1、詩集の体裁
- 二、2、作品の制作年月
- 二、3、作品群の主題
- 二、4、詩集の出版

三、『田奇詩集』の作品研究

- 三、1、主要主題論
- 三、2、内容(思想)論
- 三、3、表現方法論

四、諸家の批評

五、結語

本論

一、作者研究

一、1 出生と成長の過程

本名、劉世凱。一九二八年、農曆十一月初五日(十二月二十五日)山西省清源縣城內で生まれた。本籍は山西省忻州市西高村。漢族。父は劉清、字は印潭。中学卒業。三十年代初め、県の公安局長を数年勤めた。後に本籍地に帰り農業を営む。中華人民共和國の政策の規定で、家庭は中農の身分であったから、

父は農民になったのであろう。一九六〇年死去。母は胡氏、その家庭は中農の身分で、家庭婦人(主婦)で、一九三四年死去。田奇は、幼年期には私塾と小学校で学び、抗日戦争の勃発後は学校をやめて放浪した。牛飼いの手伝いをしたり、丁稚になつたこともある。この期間に、多くの中国古典文学作品を読み、文芸を愛好した。

最初に現代の文学作品に接触したのは、一九四〇頃で、流行小説を読んでいた。中学に上がる時期に、新文学に接近し始めた。例えば、高爾基(ge. er. ki: ゴーリキー: ソ連の作家。一八六八〜一九三六)魯迅の作品、普希金(p. x. i. jin: 普希金: p. x. i. jin: 普希金。プーシキン: ロシアの詩人・小説家。一九七六〜一八三七)、艾青(一九一〇〜一九九六。浙江省金華県の人、詩人。『人民文学』主編、中国作家協会副首席。『艾青全集』五巻などがある)、何其芳(一九一二〜一九七七。詩人、作家、批評家)、臧克家(一九〇五)。詩人)など詩人の詩作品である。四十年代、自由詩を書く。五十年代、民歌体と格律体の詩を書く。多くはその場限りの作で、生活感情が乏しく、詩芸術の追求が穏当でなく、形式的な傾向があった。六十年代から七十年代に掛けて、農村へ十年間下放させられて、創作の空白を作った。しかし、詩風の転換のためには思考に適度の空間を提供したとも言える。八十年代の始めにかなり明確な詩歌芸術の追求に入った。『田奇詩集』はその代表的な作品集である。

一、2、経歴 新詩創作の進行と活動

田奇という名前は、一九四四年に使い始めた。一九四九年三

月、革命に参加した時、即ちこの名前を用いた。一九四四年新詩を書くことを学び、一九四六年から山西省太原市の『太原日報』、『陣中日報』副刊に、筆名(ペンネーム)洛煤、丁艱、聞風起、を用いて新詩と散文を発表した。詩に「没有見過的墳」(筆名は丁艱)、「心」(筆名は聞風起)等が有り、その時期に刊行物に載った詩は五十余首、散文五篇であった。一九四九年初、華北大学戲劇学部を卒業。北京で詩人田間(一九一六—一九八五、安徽省無為県の人。五八年、河北省文連首席となった。詩集十数冊があり、『田間詩文集』が出版されている。)と知り合う。北京にいた間に、詩人蘇金平、黄秋池と交流し、併せて『詩号角』(北京出版)、田間主編の『詩刊』、詩人芦獲編の『進歩日報』(天津出版)副刊、詩人徐放編の『人民日報』(北京出版)副刊上に、新詩を発表した。後に、詩人田間(前出)から周而復(一九一四—)安徽省旌徳の人。上海統一戦線部副部長、中国作協理事となった事がある。長編小説『上海的早晨』、『万里長城図』等多く出版されている。)への推薦で、上海で詩集『修提』を出版した。

同年冬、北京から西安勤務へと配置替えになった。陝甘寧辺区文化協会曲芸組に勤務。西北文連創作の家、「陝西文芸」編集部、中国作家协会西安分会(西北五省を管轄し始めた。〈事務所所の所在地で命名、後に陝西分会と改める〉)に勤務し、創作員(西北文連專業作家)、編集等の職を勤める。

一九五八年、陝西省民歌整理小組組長となり、焦坪職工新民歌に基づき、歌詞「唱支山歌給党聽」(後に「雷鋒日記」に引用された)を改正した。同年夏、全国民間文学工作者代表會議に

出席した。

一九五九年、中国作家协会陝西分会会員となる。その後、中国作家协会陝西分会詩歌工作组組副組長、西安市詩歌工作者連誼会副主任、長安詩社委員、長安詩家編委會顧問、中国当代青年詩人叢書顧問、西北工業大学文学社顧問を歴任。

なお、『中国文学家辞典』現代第四分冊(一〇二—一〇三頁)四川文芸出版社、一九八五年八月版、に伝記が収録されている。田奇氏は、一貫して新詩の活動を支持し、八十年代、更に余力を尽くした。全国で影響力のある女流詩人舒婷(一九五二—)福建省泉州県の人。福建省作家协会副主席。『双桅船』がある。)の詩が、論争を巻き起こした時、「沈思的三楞鏡」(『福建文学』一九八一年第八期)を書いて、その探求を肯定した。併せて、詩人涓水、劉斌、刁永泉、商子秦、等の詩集の出版に対してあらかじめ協力した。沙陵、子頁、等の詩集を出すについては、出版社と印刷工場の間を奔走した。沙陵、梅紹静、刁永泉、商子秦、曉雷の詩の批評紹介では、戈壁舟、玉泉、魏鋼焯と心を合わせた。

現在、中国作家协会会員、世界華文詩人協会会員。また、一九九一年、陝西省文史研究館館員(終身制)、一九九三年六月十日、陝西省作家协会名誉理事に聘せられ、一九九七年二月には、文史館太華詩社副社長に任命された。

以上は、田奇本人の提供してくれた資料、書簡、田奇の友人の著書・劉斌著『遙遠的詩壇』(奧林匹克出版社 一九九二年第一版)、『中国文学家辞典』(前出)等によってまとめた。

一、3、出版作品集

主として、田奇本人の提供してくれた資料、書簡等によると、以下のようになっている。

・短詩集『修提』 上海文化工作社版 一九五一年第一版

・短詩集『十輛水車』 西北人民出版社版 一九五一年第一版

・長詩単行本『蘇艾蘭』 西北五省報紙「群眾日報」圖書出版部 一九五一年版

・長詩単行本『洛河曲』 上海文化工作社版 一九五二年 第一版

・抒情詩集『田奇詩集』 未來出版社版 一九八五年八月 第一版

・『田奇散文集』 香港 天馬圖書有限公司 一九九三年六月 初版

・『田奇集』 (二一世紀陝西作協叢書之一、陳忠実主編) 天馬圖書有限公司 一九九六年五月第一版

なお、『田奇散文集』末尾の作者簡介に、『中國作家大辭典』、香港中華文化出版社『世界華人文化名人伝略』(文學卷)に伝記がある、と記す。また、発表評論百編と記す。

二、1、『田奇詩集』の成立の研究

二、1 詩集の体裁

『田奇詩集』の体裁(装丁)は以下のようになっている。

(表紙)

縦十九センチ、横十二センチメートル、厚さ九ミリ。黒い表紙に、金箔色で、左から右への横書きで、「田奇詩集 田奇 未來出版社」と三行で凹記されている。背文字は縦書きで、表紙と同じ字が凹記されている。

(見返し)

これには簡単なカットがある。桃色の太陽らしき楕円形のもの、その左側に木の幹、木の幹の左に鳥が一羽、太陽の右側に少し離れて太陽の光(コロナ)であろう五つの太く短い線、その外側に鳥が三・四羽。太陽の桃色以外は薄い鼠色。

文字は左から右への横書きである。太陽の陽光の下あたりに、「田奇」、木の根元近く左に寄せて、「未來出版社」、そして、地上の位置に白抜きで手書き文字の行書スタイルで「田奇詩集」とある。その下に黒字に桃色抜きで、「TIAN QI SHI」¹とある。「田奇詩集」の字は他の字の四倍ほどのスペースを取っている。

(扉)

これには、ゴシック文字で左から右へ「田奇詩集」とあり、その下に、「田奇」底辺に「未來出版社」の字がある。

扉の裏に、「奥付け」に相当するものがある。横書きで、以下のように記載されている。

「責任編集…高華

封面設計…王炎林

・長安詩叢

田奇詩集

田奇著

未来出版社出版

(西安北大街131号)

作家書屋発行 臨潼県文華印刷廠印刷

787×1092毫米 36開本 印張3.333 挿頁 70

千字

1985年8月第一版 1985年8月第一次印刷

印数・1—5,000冊

統一書号・10303・69 定價・0.65元

・(目錄)

見出しに5行。以下、篇名、ページ数が記されている。目錄(目次)は一〇五頁。

・(本文)

見出しに5行、篇毎に改頁している。六十一作品が収められている。本文は一〇百十二頁。

・(裏扉)

著者の胸部より上の顔写真、略歴がある。

略歴は以下の通り。

田奇、原名劉世詠、山西省忻州市人。一九二八年生。曾出版短詩集与長詩各兩冊。胡采称其前期短詩“詩風朴素自然”。

孫克恒、唐折、高平著文称其后期詩《中国的太陽》有“表現上の力度”。此集為近年新作。系中国作家協會陝西分會會員、并在該會工作。

・(裏表紙)

右下隅に横書きで、

「統一書号・10303・69

平装定價・

0.65元

精裝成本・

1.56元

と金箔色で凹記されている。

二、2、作品の制作年月

詩集には六十一の作品が収められている。(連作を個別に数えれば八十五篇となる)全ての作品が、過去に発表されたものである。

冒頭の作品「中国的太陽」は「一九八三年夏——冬」とある。

巻末の作品「海辺草没有露」は「一九八五年」とある。しかし、中間にある作品は、必ずしも、年月順には配列されてはいない。

いま、「篇目」(題名)、篇末にある制作時期を示すとみられる

「年月日」、及び「本文の行数」、を示すと次のようになる。

なお篇目の前に付けた算用数字は、作品整理のために筆者が付けた「作品番号」である。また、同一篇目(題名)の下にある

連作には、A、Dの記号を付けてある。連作の制作年月は、連作の最後の作品の末尾に書かれている。制作時期の記載がない

ものには、篇目の次に(?)がある。これも筆者が付けた。

使用されている漢字の字体は中国の簡体字である。本稿では原則として日本の常用漢字を使用した。

「作品制作年月表」

- 1 中国的太陽 一九八三年夏——冬 52行
- 2 春天在雪山和太陽之間 一九八三年夏——冬 12行

- 3 石河子的風 一九八三年五月二十日石河子 36行
- 4 石河子的洒水车 一九八三年五月十七日石河子 13行
- 5 石河子的傘是綠的 一九八三年五月十八日石河子 16行
- 6 天山牧場 一九八三年六月于天山牧場 28行
- 7 天山派
- A. 年輕的天山——致揚牧 19行
- B. 沙漠的十億只耳朵——致章德益 14行
- C. 潞城——致周濤 一九八二年十二月
二十五——二十七日 17行
- 8 天山六月雪
- A. 我的心有六條觸角 28行
- B. 白雪清亮的投影 32行
- C. 雪、燙紅了小手 13行
- D. 天山羊躲雪 一九八三——一九八四年 18行
- 9 新疆的大風 一九八三年五月——六月烏魯木齊 37行
- 10 戈壁——我的胸懷 一九八三——八四年 19行
- 11 我的眼睛洒落了春雨 一九八三年四月四日于臨潼 21行
- 12 小鳥駛來了清新的空氣 一九八三年四月五日于臨潼 25行
- 13 小犢搶乳 一九八三年四月六日于臨潼 19行
- 14 這里的綠葉是香的 一九八三年四月八日 24行
- 15 詩鳳凰、你有帶刺的翅膀 一九八三年四月九日 43行
- 16 我不要 一九八三年三至四月臨潼——西安 28行
- 17 門不要推 一九八三年四月二日 30行
- 18 沈重的碑 一九八三年四月十四日 25行
- 19 王老九之碑 一九八三年四月臨潼——西安 40行
- 20 王老九家鄉的空氣 一九八三年四月臨潼——西安 27行
- 21 我曾經來過這里 一九八三年四月臨潼——西安 23行
- 22 熄滅的和燃燒的火把 一九八三年十月二十六日 37行
- 23 一張歷史照片 一九八三年十月二十五日至二十八日
陝西作協 41行
- 24 愛情老了 一九八二年六月十六日 8行
- 25 心碰心 一九八二年六月十七日 10行
- 26 不想念 一九八二年六月十九日 9行
- 27 不說什麼 (??) 18行
- 28 三月的風 一九八二年三月三日——十五日 31行
- 29 登大雁塔 一九八二年四月二十一日 24行
- 30 西邊春天東邊秋天——西安西郊紀實 (??) 16行
- 31 和平路的烤羊肉 一九八三年八月二十一日 13行
- 32 睡着的早晨和醒着的早晨 一九八三年十月一日陝西作協
104行
- 33 麥葉兒纏着陽光 一九八一年十月二十日 18行
- 34 陝北某詩人朗誦 一九八一年十一月二十日 12行
- 35 給家鄉
- A. 牛 12行
- B. 我放過的花牛 11行
- C. 秋 (??) 11行
- 36 元好問家鄉行
- A. 神沱河 13行
- B. 家山 12行
- C. 東過定襄 11行

- 37 我是八月的高梁望紅了眼 一九八四年五月十一日——
D. 走晉陽 (?) 13行
二十一日陝西作協 39行
- 38 平地一声雷 一九七九年六月五日 12行
- 39 丁香 一九七九年六月十日 12行
- 40 田鷄 (?) 12行
- 41 石榴 一九七九年七月一日 8行
- 42 無花果 (?) 12行
- 43 啄木鳥 一九七九年七月二十三日 12行
- 44 石縫丁香 一九八〇年五月于翠花山掃來 9行
- 45 蛇 一九八〇年十月遊北京動物園偶作 8行
- 46 變色龍 一九八〇年十月觀北京動物園后作 8行
- 47 我是楓葉
- A. 楓葉說：我老了 9行
- B. 霜与楓葉 9行
- C. 楓葉輕歌 8行
- D. 朦朧楓葉 一九八〇年十月——十二月 8行
- 48 太陽的歌吟 一九八一年三月四日 8行
- 49 風的顏色 一九八一年三月八日 10行
- 50 無題 一九八一年三月十一日 7行
- 51 在公共汽車上
- A. 站 6行
- B. 軔彎 6行
- C. 矛盾 一九八〇年二月二十五日 8行
- 52 台灣省的傘
- 53 馬路 一九八〇年七月四日 12行
- 54 母与子
- A. 你應諾母親一些什麼？ 31行
- B. 母親的臉是晴天 29行
- C. 所有光線，守着你 一九八四年二——三月 20行
- 55 柯仲平
- A. 柯仲平性格 12行
- B. 你坐着 22行
- C. 話語在喉嚨里 一九八四年八月二十九日 17行
- 56 傅庚生先生
- A. 書齋 18行
- B. 出血的眼睛 一九八四年十月十三日——十五日 13行
- 57 女詩人、抓住詩的胎盤 (?) 27行
- 58 年貨市場有感
- A. 買小紅蠟燭 7行
- B. 醉棗 8行
- C. 爆竹 8行
- 59 海洗淨的黎明 一九八五年 13行
- 60 吞沒太陽的海 一九八五年 15行
- D. 香色 一九八五年二月十日——十三日 12行

以上。

この表を見ると作者はほぼ主題毎にまとめていることが分かる。同一主題の中では、配列を入れ換えているところもある。(例えば、3は5の後に入る管のものである。)しかし、原則的には年月順にしていることが分かる。

二、3、作品群の主題

前項で検討した「作品の配列の仕方」と主題との関係は、この詩集の構成に関係があると考えられる。そこで、本項ではこの問題を細かく検討することとする。

これに付いては、便宜上、既に前に示してある「作品制作年月表」の作品番号を使って説明することにする。

①・作品番号1〜10

1・「中国の太陽」は、新疆の圧倒的な強烈な光と熱を放つ太陽を描くことで、新中国のエネルギーを象徴的に表現している。五一、五二句の「晒巴、中国的太陽/你是我們新的時代意象」は、その表現である。この詩は、巻頭を飾るにふさわしい「愛国の詩」といえよう。

2・新疆の春、を詠っている。

3・4・5・新疆の石河子の風、散水車、雨(と木の緑)、を描写している。さわやかな詩である。

6・7・8・天山山脈の麓の放牧場の動物や人々の風景。雪解け水の伏流、砂漠の砂、路城の君への便り。雪の結晶、雪の影、雪焼け、雪を避ける羊、などを詠っている。

9・強風によって動植物は鍛えられる、という作者の見方が述べられている。

10・「ゴビこそ私の気持だ」という。この一群の詩の結びらしく力強い詩である。

この一群の作品は、新疆ウイグル自治区の自然と生活を描写する中で、中国国土の素晴らしさが巧まない表現の中で詠われている。

全体として、新疆の自然の大きさ、強靱さ、荒々しさに好意を示している。

②・作品番号11〜21

11・王老九の思い出に涙している。

12・「小鳥よ、私の心を連れていって」と詠う。(小鳥は王老九の変身と考えているのかも知れない)

13・子牛と母牛の愛情、を詠う。

14・若葉の香り、を詠う。

15・素晴らしい詩、を詠う。

16・王老九の熱い血が欲しい、と詠う。

17・王老九の心を乱さないで、と詠う。

18・重い碑は王老九のベッドである、と詠う。

19・王老九を忘れない、詠う。

20・王老九の故郷の空気、を詠う。

21・王老九は今どうなっているのか、と詠う。

この一群の作品は、臨潼——西安での感懐を詠う。中に、「小鳥」「子牛と母牛」「若葉」「詩」を詠うものもあるが、他はみな

王老九を回想している。王老九という詩人の偉大さを偲び、その精神を受け継ごうという姿勢がみられる。

③・作品番号22〜23

22・消えたのと燃えている火。

23・一枚の写真。

この二作品は、政治に付いての寸感を表現している。毛沢東（？）への崇拜の念（それは新中国への賛美）を表しているとも見られる。

④・作品番号24〜27

24・恋に臆病になった、と詠う。

25・あなたに安心しきっている、と詠う。

26・あなたが恋しい、と詠う。

27・あなたの瞳には、満腔の愛がある、と詠う。

この一群の作品は、みな恋心を詠っている。しかし、強烈ではない。控え目で、おぼろげとした感じである。

⑤・作品番号28〜32

28・三月の風は、雨を降らし世の中を洗った、と詠う。

29・大雁塔での愉快な思い、を詠う。

30・西安のトマトとキューリの様子、を詠う。

31・羊の焼き肉のこと、を詠う。

32・朝の市井の二つの様子、を詠う。

この一群の作品は、西安の自然と市民の生活の様相の描写、そして、それらに対する感懐を表現している。

⑥・作品番号33〜37

33・麦の葉と日光と、を詠う。

34・詩人の朗唱の強烈な印象、を詠う。

35・牛の暖かさ、花牛の思い出、秋の風景、を詠う。

36・元好問と同郷であるところから、帰省したときの特別の感慨、を詠う。

37・故郷での幼少の頃の思い出、を詠う。

この一群の作品は、陝西省と、故郷での思いを表現している。その中で、36は、山西省出身で金王朝の大詩人であった元好問を取り上げ、同郷の大先輩への尊敬の情を表現している。

⑦・作品番号38〜50

38・強く生きることへの決意、の表明をしている。

39・丁香は強い花である、と詠う。

40・蛙は益虫といわれるが、歌声と肉体を捧げ、人に取って喰われる、と詠う。

41・ザクロの表皮にだまされないので、秋には赤くなるから、と詠う。

42・イチジクは身を捧げ種を残さない、と詠う。

43・キツツキは花や実には振り向きもしない。一生木に付く

虫の天敵で過ごす、と詠う。

44・石の隙間の丁香は山の風にあざれ花咲き香る、と詠う。

45・蛇の心は冷たく、赤い舌は敵意に充ちている、と詠う。

46・あらゆる境遇に適応する変色はあなたの気骨である、と詠う。

47・カエデの陽気な色彩、霜は愛情の死者である、リンゴは私の歌を理解できる。私の無言の願いを看破して欲しい。と詠う。

48・カエデの陽気な色彩、霜は愛情の死者である、リンゴは私の歌を理解できる。私の無言の願いを看破して欲しい。と詠う。

48・聞く耳があれば日本の歌が分かる、詠う。

49・風よあなたは流れ止まない、と詠う。

50・日光は太陽を私の心においた、と詠う。

この一群の作品は、自然界の現象や動植物に寄せた想いを表現している。多彩な内容である。

⑧・作品番号51～54

51・バスの駅での観察、カーブでの経験、車中での会話、を詠う。

52・台湾製の傘をさしての感想。雨は祖国の土を懐かしく思う。と詠う。

53・道路にての思考、を述べる。

54・母と子の会話、母の期待過剰に子は何を約束したか？母親の顔は晴れて、生命の光と熱は甘んじて受けさせる。全ての光線はあなたを見守っている。と詠う。

この一群の作品は、主に市井生活の環境と、そこで目にした人間についての感想を表現している。

⑨・作品番号55～57

55・柯仲平への思い、を詠う。

56・杜甫研究者の傅庚生先生への敬愛の念、を詠う。

57・詩人への思い、を詠う。

この一群の作品には、文学者（特に詩人）に寄せる想いが強烈に詠われている。

10・作品番号58

この作品は、市場での正月用品の買い物と、その物への感想、を詠う。題名どおりの内容である。

11・作品番号59～61

59・海の夜明けの美しさ、を詠う。

60・太陽と海との関係、を詠う

61・海辺の草と露、を詠う。

この一群の作品は、自然界（特に海）を詠う。冒頭の新彊を詠った部分は重量感があるから、これとは比較にはならないが、自然を詠っているということ言えば、呼応している。

ここで、詩集全体のテーマのグループ数についてまとめる。

田奇氏の目次では、篇名と頁数を記した箇所、一行空けてあるところが九箇所あり、全部で10グループの区分を示している。

なお、田奇氏の目次では、38～54の箇所は一つにしている。そこを、筆者は、38～50、51～54の二つに分けたのである。つまり、①～⑥グループと巻末の二つのグループの部分の分け方は、筆者も田奇氏と同じである。ただし、⑦グループの分け方が違っている。筆者は、全部で11のグループとしたのである。作品を検討した結果、田奇氏と筆者の考えには小異があるが、上述のように、作品の配列と主題との関係は極めて密接であることが分かった。

二、4、詩集の出版

一九八五年八月、五千冊が出版された。（扉の裏に記載されている。）なお、再版されたとは聞いていない。

(付記)

この詩集は陝西省現代文学学会の「陝西十年詩集賞」を受賞したものである。

以上。

一九九七(平成九)年八月下浣 以文会友書屋にて記す。

(追記)

本論考を提出後の一九九七年十一月に、中国の西安市にいる著者田奇氏から『田奇集』一冊が送られてきた。『田奇集』には『田奇詩集』所収以外の詩を含む百三十四篇が収められており、制作年代順に配列されている。

従って筆者が論及した『田奇詩集』には右の作品集の三分の二の詩が収められていることになる。なお、『田奇集』には短詩百三十四篇の他に、散文四十三篇、文論十九篇、付録七篇が収録されている。

一九九七(平成九)年十二月二十日

(上越教育大学教授)